優秀賞　埼玉県　唐澤 美果 様（４０代　女性）

盆休みに帰省すると、九十三歳になる祖母が笑顔で迎えてくれた。足腰はめっきり弱り部屋の中でも杖をついて歩くようになってはいたが、表情や声はまだまだかくしゃくとしていた。

ただ最近とみに耳が遠くなったらしく、会話が聞き取れなくなったのが辛いと言う。家族の勧めもあって作ったという補聴器が、祖母の右耳には収まっていた。

「家の中だけなら片方だけでいいと思ってね、作ったんだけど、調整が面倒で」

やっぱり人間の耳は凄いのねえ、としみじみ呟く祖母は、それでも一対一の会話には不自由しなくなっているようだった。

その後、夕食の片づけの際に母と話していて、祖母の補聴器が話題に上った。補聴器って高いんだねと素直な感想を口にした私に、母は、あれはおばあちゃんが自分で買ったのよと教えてくれた。

「おばあちゃん、自分の老齢年金の他におじいちゃんの遺族年金と軍人恩給も受け取ってるでしょ。それをちゃんと管理していて、補聴器や介護用品を買うのに使ってるの」

実際に買い物をしたり病院に連れて行くのは母や父なのだが、祖母は自分にかかる支払いはきっちりと自分の財布から出しているのだという。それだけではない。曾孫にお年玉を渡したり、親戚が集まった時の会食の補助をしてくれたりもする。そういえば正月に家族で外食をした時、祖母がまとめて会計をしてくれていたっけ。

「自由に使えるお金があるから、おばあちゃん、今でもしゃんとしていられるんだと思うよ」

母は居間でテレビを観ている祖母を眺めながら言った。

六年前に他界した祖父は、私の知る限りお金に頓着しない人だった。「おじいちゃんは人はいいけど頼りない」というのが家族の共通認識で、兼業農家だったが、会社の給料も農業収入も全部祖母が管理をしていた。だから祖父が退職金の大部分を株券に替えてしまった時、そしてバブルが弾けてその株が暴落してしまった時、祖母はずいぶん立腹していたものだ。

生前はそんなふうにお金に縁がなく、まとまった遺産も残せなかった祖父ではあるが、こつこつと勤め上げ年金をきちんと納めていた。その結果が今、祖母の

余生を潤し生活に張りを与えている。年は取ってもまだ自分の暮らしには責任を持っている、そんな矜持が祖母の気持ちを支えているように思えた。少し頼りなかったけれど、真面目で堅実な祖父の人生そのものが妻への遺産になっている。私は少しだけ祖父のことが誇らしくなった。

私も二十歳から国民年金を納め始め、社会人となって以降は毎月の給与から厚生年金を控除されている。多くはない手取りからさらにこんなに引かれるのか、とため息が出ることも少なくはない。受給年齢になった時に果たしてちゃんともらえるのかなんて心配もする。

しかし、現役の間真面目に納付していた祖父が妻にささやかな誇りを遺せたように、私も誰かに幸せを贈れるのなら悪くないと思う。今の誰かを支え、未来の誰かに遺す。それは老後の自分自身かもしれないし、私の家族かもしれない。あるいは今納めている年金そのものが祖母や他の受給者への原資になっていると考えれば、すでに私も貢献できているということだ。

欠点もあるのだろうが、年金システムの根っこにあるのは相互扶助の精神だ。自分がいつか支えられる立場になった時、胸を張って受け取れるように、今はしっかり貢献しておこう。補聴器をつけた祖母のいる実家でのんびりとした盆休みを過ごしながら、そんなことを考えた夏だった。